

お坊さんは なぜお経を読む？

●目次●

はじめに——お経は心の処方箋^{せん}

1 お経の成り立ち

① 処方箋の内容……………2

② 「私はこのように聞きました」……………4

③ 教えの追体験……………5

④ 言葉の壁を超えて……………7

コラム 三蔵法師……………9

2 さまざまなお経

① お経を読む……………10

② 亡き方に語りかける言葉……………12

③ お経の構造……………13

コラム さまざまな法要……………18

3 響きの中で

① 音源はどこ？……………20

② 声のお供え物——その声が届いている……………22

はじめに——お経は心の処方箋

「お経」と聞くと、どんなことをイメージしますか？

「聞いてもよく意味がわからない」「右から左へ耳を通り抜けていくだけ」というのが本音かもしれません。しかしもしかしたら、「ナンダーアーナンダー」などというフレーズを聞いたことがあるという方もいることでしょう。これは「何だ？ あゝ何だ？」と聞こえますが、実はナンダ（難陀）とアーナンダ（阿難陀）という、仏教の開祖お釈迦さまの弟子の名前です。

このように、音だけではなかなか理解できない読経の響きではありますが、実はその内容は、私たちの生き方を豊かにするヒントにあふれたものです。なぜならお経は、お釈迦さまが、悩み苦しむさまざまな人々、ときには神さまや動物に対して与えた、よりよく生きるための指針だからです。そう、お経はお釈迦さまから出された心の処方箋なのです。

1 お経の成り立ち

① 処方箋の内容

私たちが抱える苦しみは、一人ひとり異なるものです。同じ人間でも、年齢や状況に応じて、悩みの種類は変わってきます。お釈迦さまの教えは、そのような人生に悩み苦しむ人々に向けられたものです。その言葉を受け取った人は教えをその通りに実践して、自分が抱える苦悩から解放されてきました。

例えば、病気になるとその病気に応じた薬を服用しますね。風邪にかかれば風邪薬を飲み、腰が痛ければ湿布をはります。ガンを患えば抗ガン剤で治療することもあるでしょう。病気を治すにあたって大切なことは、その病気に効く薬を用いることです。お医者さんはそれをしっかりと理解して、患者さんの病状に合わせて処方箋を出すわけです。お釈迦さまが残した多くの言葉も全く同じです。それは、悩み苦しむ助けを求め自分のもとを訪れた人々に対して、その人が心の健

康を取り戻すために発せられたものなのです。

お釈迦さまは本当に多くの人々に教えを残しました。あるときには、夫も子どもも失った女性に「子どもを亡くした母親が流した涙は海の水よりも多いんだよ。この移ろいゆく、悲しみ苦しみ多い世の中で、仏道を歩んでみないかい」と救いの手を差し伸べました。またあるときには、幸せとは何かと尋ねる神さまに「父母に仕えること、家族を愛おしみ大切にする、仕事が順調に進んでいくこと、これが幸せなんだよ」と説き示しました。

お釈迦さまは言葉で教えを示すだけではありません。息子に裏切られ、幽閉された王妃さまに仏の清らかな世界を見せて、この世に絶望した彼女に生きる指針を示したこともありました。

お釈迦さまは巧みな手立てを駆使し、言葉の限りを尽くして、苦悩を感じる人々がそこから抜け出すためのヒントをさまざま提示したのです。

②「私はこのように聞きました」

お釈迦さまからの処方箋であるお経はどのようにできたのでしょうか？

それを考えるヒントは「如是にや我聞がもん」（または「我聞如是」）という言葉にあります。見たことがない四字熟語だなと思う方もいるでしょう。

「如是我聞」とは「このように私は聞きました」という意味で、多くの経典はこの言葉から始まっています。「私」とは先ほど出てきたアーナンダ（阿難陀）のことです。このアーナンダは長年、お釈迦さまのそばに仕えて行動を共にし、多くの説法を聞いていました。

お釈迦さまは八十歳でお亡くなりになり、その直後から、残された弟子たちはお釈迦さまの言葉を共有しようと考えました。そこで白羽の矢が立ったのが、たくさんのお釈迦さまの教えを聞いていたアーナンダでした。彼は自分が聞いたたくさんのお釈迦さまの教えの一つひとつ、「このように私は聞きました」といってみんなの前で話し、それを聞いた弟子たちはアーナンダの言葉を繰り返し声に出して復唱しました。この儀式を「結集（サンギータイ）」といいます。インドの古い言葉「サンギータイ」